

特集3 | ホスピタリティに見るデザイン

3

DESIGNING FOR HOSPITALITY

ホテルのインテリア
マンダリン オリエンタル 東京
MANDARIN ORIENTAL, TOKYO

「マンダリン オリエンタル 東京」が日本初進出を遂げたのは、2005年12月である。オープン時から最先端ホテルとして注目を集め、外資系ホテルブームの火付け役になったといっても過言ではない。2006年には、「アメリカン・アカデミー・オブ・ホスピタリティ・サイエンス」から世界初の6つ星ホテルの称号を獲得した。

ホテルのためにデザインされたオリジナルのファブリックは、マンダリンのフィロソフィーである「センス・オブ・プレイス」を追求した証しだ。それこそが「おもてなし」のひとつだという。

そこには、世界屈指のラグジュアリーホテルの座を不動のものにしたホテルづくりが、かくされている。

“ホスピタリティ”という言葉は最近はやりのようによく耳にするが、英語でいうところの“Hospitality”とは、日本語でいうところの「もてなし=あしらい、待遇」[出典:広辞苑]に、「親しみがあって、物惜しみしない」が加わらなくてはならないだろう。「マンダリン オリエンタル ホテル グループ(以下、マンダリン オリエンタル)」では、世界でラグジュアリーなホテルの数々を運営するにあたり、まず従業員に使命と行動指針を植えつけているが、そ

の大きな柱に“Delight=楽しませる”がある。平たくいえば、お迎えするお客さまを楽しませ、感動させるサービスを提供することだが、これこそが「マンダリン オリエンタル」のおもてなしの根幹だ。これはサービスのみならず、ハードウェアにも活かされており、そこには「Sense of Place=ホテルが立地する土地柄に敬意を表したホテルづくり」が理念として存在している。世界中の「マンダリン オリエンタル ホテル」

は、その都市や街の歴史的・文化的な顔であり中心地に居を構えているが、「マンダリン オリエンタル 東京」は、江戸の粋が花開いた日本橋のランドマークに入居している。文字どおり東京の真ん中に聳え立つ日本橋三井タワーの最上部にホテルの大部分、すなわちロビー、全179の客室、レストラン&バー、スパがあるが、そのすべてに床から天井まで広がる一面の大きな窓を設けている。大都会東京の地平線から昇

る朝日と富士の稜線へ沈む夕日を独り占めする眺望は、まるで天守閣からのそれであり、絶景はお客さまをDelightさせるおもてなしだ。館内のインテリアは日本橋に敬意を表し、ファブリックが重要なコンセプトになっている。日本人の自然に対する畏敬の念と“見立て”を取り入れ、約200mのタワーを1本の木と見立て、ホテル全体に“森と水”を表現するオリジナルのファブリックを用いてイ

ンテリアや家具を設えた。例えば、客室は“秋の森”や“夜の森”、スパは“夏の森”がコンセプトである。ファブリックはすべて、普段は着物などをつくる伝統工芸の匠の手によるオリジナル作品であり、館内の家具の張り地から、タペストリー、カーテン、ブラインド、ベッドカバー、クッション、壁紙ならぬ壁布に至るまですべてを特注で誂えた。インテリアはアースカラーを基調としており、穏やかで心安らぐ寛ぎの空間を生み出している。

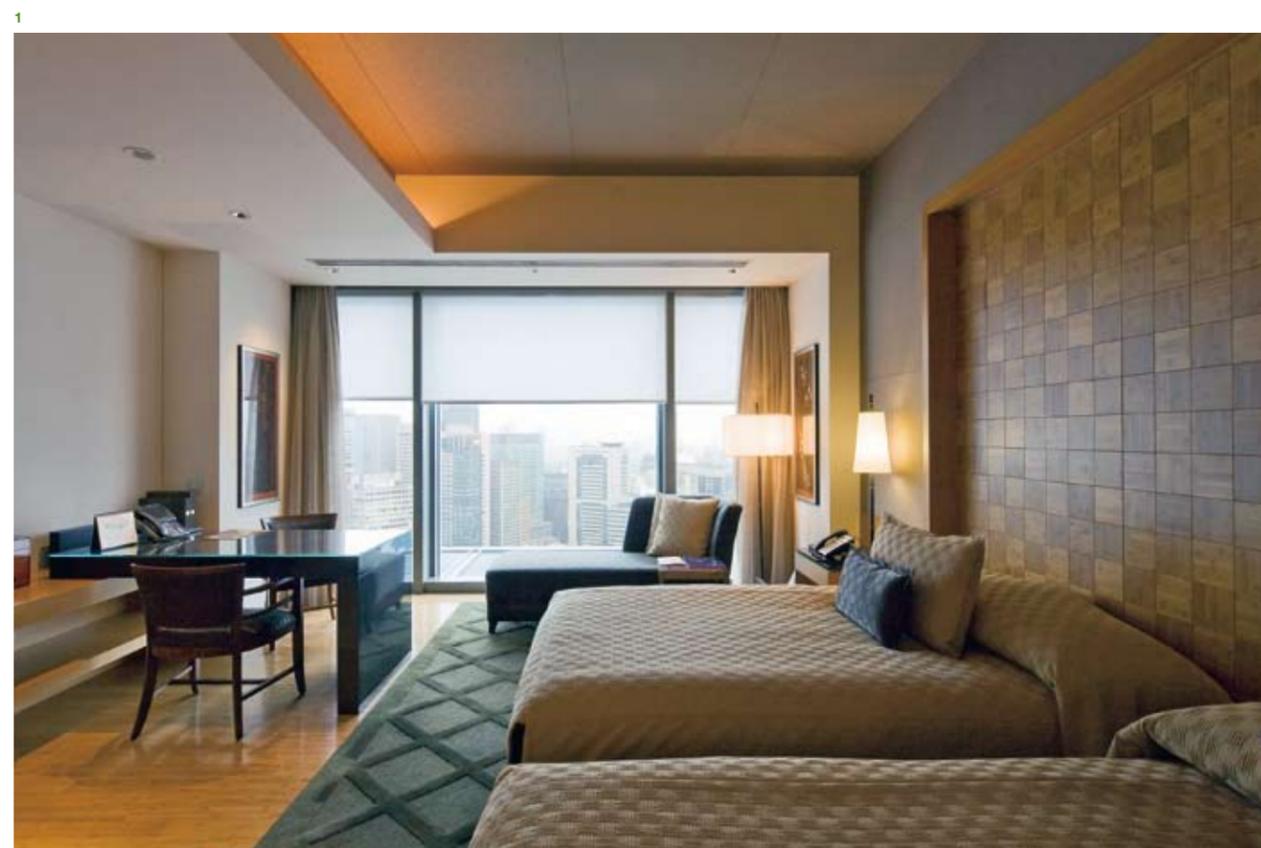
当ホテルのインテリアは、日本橋だからこそ、この佇まいを醸し出している。その“土地の記憶”を伝えるデザイン・インテリアは、「マンダリン オリエンタル」のおもてなしのひとつである。

【建築概要】

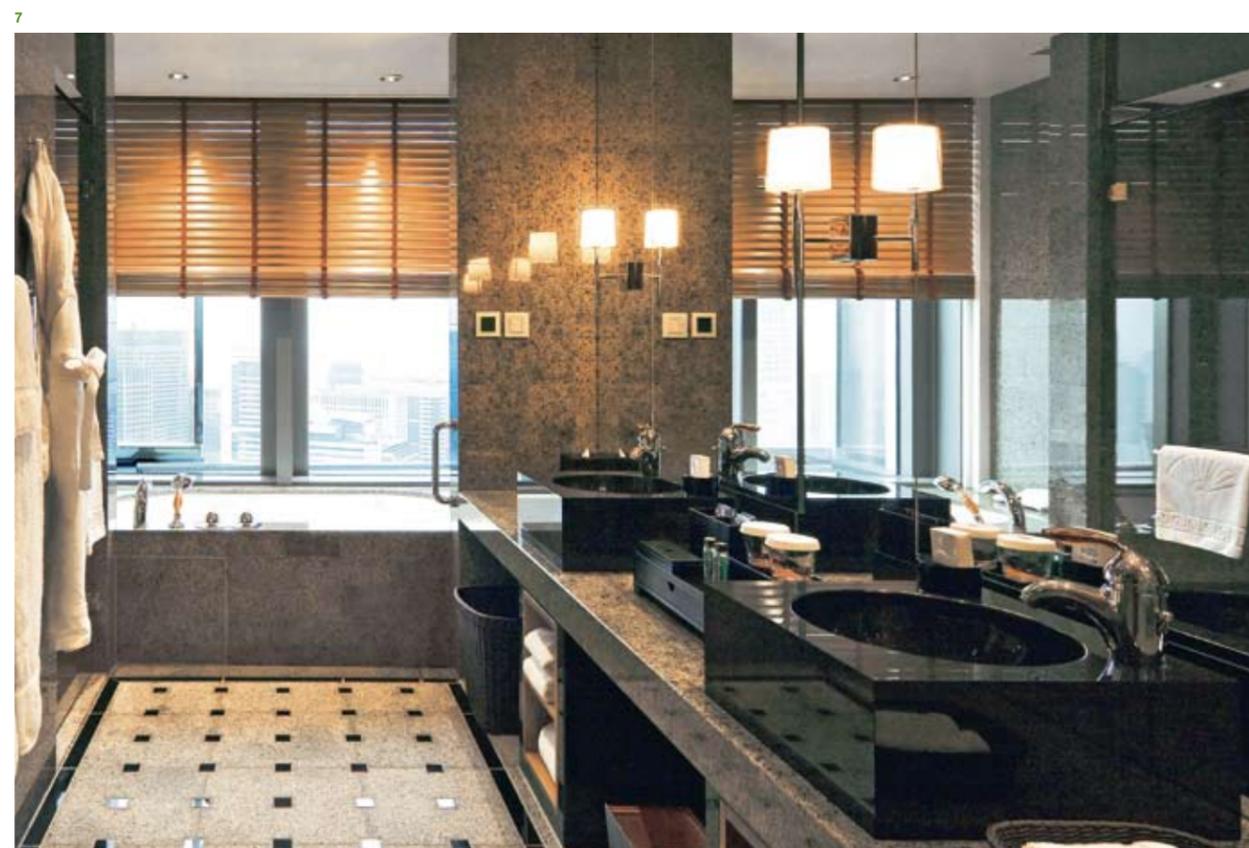
名称:マンダリン オリエンタル 東京
所在地:東京都中央区日本橋室町2-1-1
延床面積:27,414㎡ | 客室数:179室 | 開業:2005年
ホームページ:<http://www.mandarinoriental.co.jp/tokyo/>
内装設計:全体:LTWデザインワークス、37階レストラン:乃村工務社

HOTEL'S COMMENT

ホテルズコメント | センス・オブ・プレイス 早川千恵 | Chie Hayakawa



- 1—「プレミア グランド ルーム」のベッドルーム:秋の森をコンセプトにまとめられている。ブラインドはさざ波、カーテンは陽光、ランプは月あかり、ベッドは落ち葉をイメージしている
2—日本橋三井タワーの外観:1、3、30-38階が「マンダリン オリエンタル 東京」。手前は重要文化財に指定されている三井本館。三井本館の4階部分にはホテルの宴会場がある
3—世界初の6つ星を獲得した「アメリカン・アカデミー・オブ・ホスピタリティ・サイエンス」の記念盾:2006年、世界最高峰のラグジュアリーホテルという評価を得た
4—館内のファブリックは、テキスタイルデザイナー・須藤玲子氏のデザイン。エントランスは樹皮、エントランスロビーは年輪、エレベーターは木の葉である雨…、建物全体を1本の木と見立てている
5—1階エントランスロビーのファブリック:日本橋が呉服の街でもあったことから、館内のすべてにオリジナルのファブリックが使われている | 6—水紋をモチーフにした「オリエンタル ラウンジ」の絨毯



- 7—「マンダリン 스위트」の広々としたバスルーム:窓からは東京の風景が一望できる
8—木調でまとめられたドレッサー | 9—「オリエンタル 스위트」の手すきの和紙を使ったベッドサイドの照明は、月あかりをイメージしたデザイン
10—窓際に置かれたオミナエシがモチーフのソファ:釣り糸を縦横に張るという、特殊な技法で織られている
11—ベッドルームの天井に張られたファブリック:スギの木の皮がモチーフ
12—ベッドサイドに置かれた漆塗り風のみだれ箱:浴衣に江戸時代の日本橋の風景が描かれた「マンダリン オリエンタル 東京」のオリジナルの扇子が添えられている

このプロジェクトは1通のメールに始まった。「マンダリン オリエンタル」の東京進出が決まったのは2001年。同時に香港のマンダリン本部からメインダイニングのデザインコンペに参加を促す連絡をいただいた。マンダリンの考え方「センス・オブ・プレイス(その土地が持つ歴史や伝統、文化を活かしたホテルづくり)」に強く共感し、「本物らしさ」をデザインコンセプトにしたプレゼンテーションを行った。日本の建築で長く使われてきた素材や形を要

素として取り入れ、様式ではなくディテールにこだわって表現したものだ。こうして300坪に及ぶ37階の広大な「レストランフロアづくり」がスタートし、実に3年を要して完成にこぎつけた。

デザイン統括ディレクターのバイロン・ウォン氏から出たオーダーは「セクションでスタイリッシュなインテリア、しかも「誰も見たことがない空間」が欲しい」だった。この難題には、伝統的な空間や素材の考え方を生かした。

単に、ある空間をコピーするのではなく、精神性や意味を取り入れ、組み合わせを変えことによって「日本建築の雰囲気を彷彿とさせながらもモダンな空間を醸し出したい」と考えた。

同時に、最高級ホテルのレストランにおいて「ホスピタリティ」は重要なテーマだった。しかし、ホスピタリティにもさまざまな解釈があることを、このプロジェクトを通して実感した。われわれが目指したのは「エモーショナルな

ホスピタリティ」、つまり、面積が広い、天井が高いというような図面に現れる寸法的なホスピタリティではない。食事に来られたお客さまが37階に足を踏み入れた時、不思議な居心地の良さを、いつの間にか空間として体験する。そういう「場」をつくりたかった。例えば、フレンチレストラン「シグネチャー」のパーティションは、気配は感じるが威圧感を与えない障子や格子をイメージした。型抜きしたステンレス板を鏡面仕上げ

にして、奥の実風景と格子に写り込む後ろの風景をオーバーラップさせ、不思議な空間を演出した。チャイニーズレストラン「センス」の壁面には、中国由来の七宝を思わせるタイルをデザインした。それはフォーカスの違いで、時には円形、時には花模様にも見える。そして列柱に嵌め込んだガラスケースには中国の現代アートを飾った。これも着席してミニギャラリーにフォーカスした時に、初めて作家のメッセージが伝わる仕

掛けになっている。また、「マンダリンバー」の大空間を構成するエレメントには、日本古来の土と木を存分に活かした。エレベーターホールはスギ板壁と光床、オープンなバーの壁面には土壁とステンレス格子を合わせた。有機と無機の素材を対比させ、バーという「洋」の空間の中に「和」が溶け込んだモダンな雰囲気がねらいだった。「誰も見たことがない空間」のマジックがリピーターにつながっているだろうか。

DESIGNER'S COMMENT

デザイナーズコメント | 誰も見たことがない空間 小坂 竜 | Ryu Kosaka

13



14

15

16

17

18



13—フレンチインスパイアダイニングシグネチャー:ガラスや食器が、エレガントでさらびやかな空間を演出している

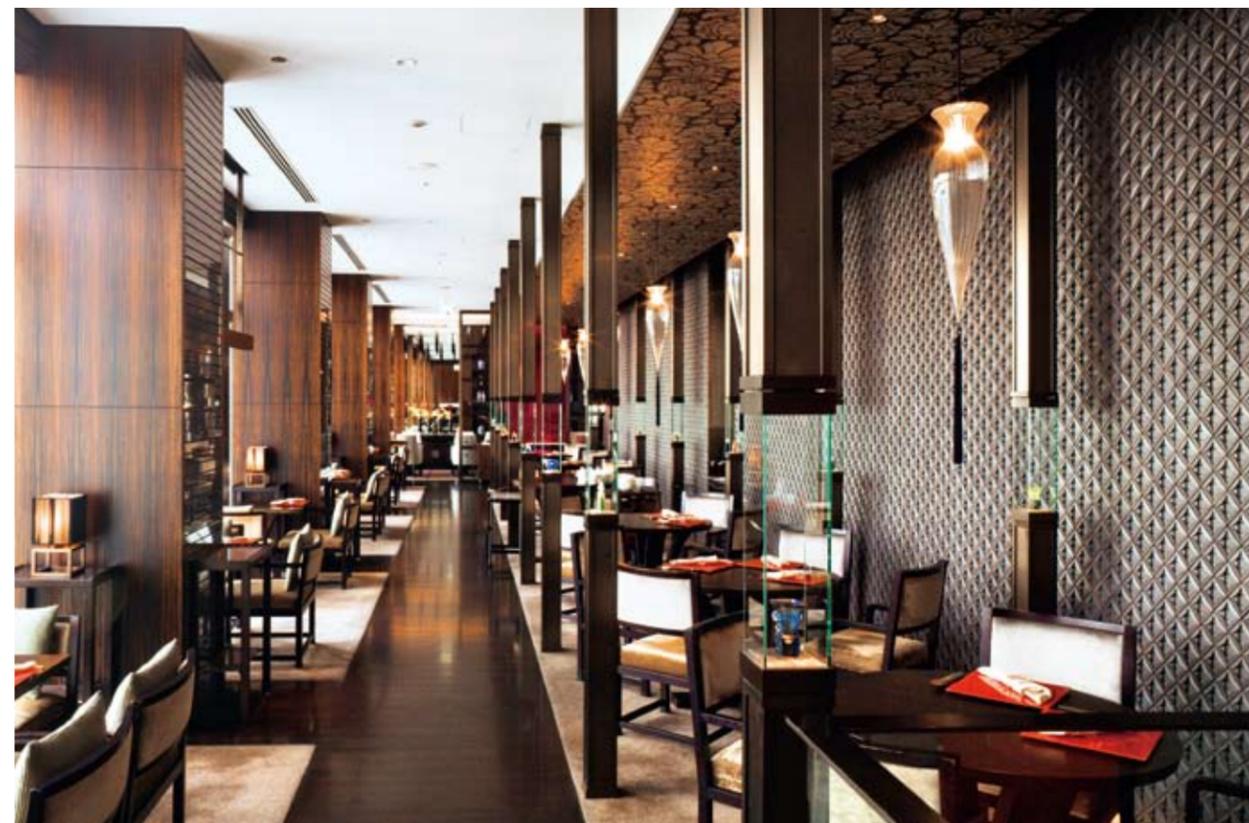
14—シグネチャーのパーティション:6mm厚のステンレス板をオリジナルパターンでレーザーカットし、鏡面仕上げを施している

15—37階と38階をつなぐ吹抜け空間:階段から、レストランフロアを一望することができる

16—センス ティーコーナー:「中華=火」というイメージから、センスの隣りのティーコーナーには三層重なった暖炉を設けている。38階のメインロビーからも見える、ダイナミックな空間

17—広東料理 センスの列柱に組み込まれたミニギャラリー:中国のアートワークが飾られ、アーティスティックな雰囲気を醸し出している | 18—オリエンタルな雰囲気の照明

19



20

21

22

23



19—センス:中国のアートワークと七宝パターンオリジナルタイルでオリエンタルな要素を取り入れ、モダンで上質な空間を演出している。壁面のタイルはフォーカスの違いで、円形や花模様に見える

20—洋の空間に和を溶け込ませたマンダリンバー:全体をエボニー(黒檀)でまとめている。その中で土壁とステンレスの格子を対比させ、インパクトを出している

21—土壁のディテール:足元には玉砂利を敷き、荒々しい土壁に鏡面仕上げのステンレスの格子を組み合わせている。格子に取り付けられたカウンターはアクリル樹脂製

22—スギをガラスで覆ったマンダリンバーのテーブル:隅々まで日本建築の素材が詰め込まれている

23—37階レストランフロアのエレベーターホール:浮遊感を出すための光床。壁は、浮遊りのスギ板の下見板張り。ここでも日本古来のディテールが美しい